101号 (No.105)

春陽帖

shunyocyo 2024



◆「第100回記念展レポート」

◆ SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 2023　part 1
春陽会 第 100 回展記念企画
「春陽会第 4 世代の作家たち」展

infomaition

第 101 回 春陽展　国立新美術館　2024 年 4 月 17 日～29 日　※23（火）休館日

【巡回】名古屋展　愛知県美術館ギャラリー　2024 年 5 月 14 日～19 日

【巡回】関西展　宝塚市立文化芸術センター　2024 年 6 月 13 日～18 日

infomaition

春陽会第 100 回展記念事業企画展覧会

『春陽会誕生 100 年 それぞれの闘い

岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ』

【巡回】

栃木県立美術館

２０２４年　１月１３日～ ３月３日

長野県立美術館

２０２４年　３月１６日～ ５月１２日

碧南市藤井達吉現代美術館

２０２４年　５月２５日～ ７月７日

詳細は
web サイトへ

ホームページ
https://shunyo-kai.or.jp

Instagram

公式インスタグラム

CONTENTS

2　introduction　理事長挨拶

第 100 回記念春陽展レポート

4　祝賀会
8　会場風景
16　審査・陳列・展示レポート
18　講演会「春陽会誕生 100 年によせて」
22　受賞の言葉

春陽会 2023

31　新会員紹介
32　追悼
岩浪 弘 、前田 舜敏、増井 英、水谷 武、大橋久純、大上吉成
38　巡回展レポート
44　SNAW2023 Part1・Part 2 レポート
春陽会第 4 世代の作家たち / 受賞作家展 / 東京研究会展
50　2023 年展覧会 PICK UP
54　全国研究会から
60　【投稿】 地域からのメッセージ

introduction



101 号春陽帖表紙／
小池 悟 「楽園」 S20

会の創立から 101 年目、第 1 回春陽展開催から 100 年を迎えた昨年、第 100 回記念春陽展を無事開催することができました。改めて、春陽会に関わる全ての皆様に感謝いたします。新型コロナ感染症が会期翌月に感染症 5 類へと移行となることが報道される中での開催は、感染症への配慮はしつつも、開放感を伴なうものでした。対策への気遣いから多少の遠慮気味感はあったと思いますが、3 年間に亘るコロナ禍への反動もあり、第 100 回を祝う気持ちとも重なって、それぞれの心に残る第 100 回記念展となったことと思います。

第 100 回記念賞の授与、祝賀会の開催、記念品の配布、そして各記念事業が行われ、企画展巡回が一部残されていますが、お蔭様をもちまして第 100 回展記念事業が滞りなく実施できましたこと、心より御礼申し上げます。
そして、安堵と共に祭りのあとの寂しさを味わう間もなく、新たなスタートを迎えました。

*

今、ダイバーシティ＝多様性の時代です。それは、「絵画及び版画表現における多様性」という狭義での意味合いだけでなく、広く「表現の多様性」の問題として、作品発表や人材育成の

春陽会新たなスタートを迎えて
－多様性の時代における挑戦－

春陽会 理事長　小池 悟

場としての公募団体の在り方そのものに大きく関わってきています。美術大学を卒業したての若手作家が出品しない傾向や、公募団体展に所属し美術大学で教鞭を執る作家はほぼいない状況等、多様性の時代の一面を現していると考えますが、「表現の多様性」が公募団体展へ及ぼす影響は更に多岐にわたって存在し、春陽会の今後の課題として認識する必要性を強く感じています。

近代産業革命以降の工業化社会を経て、情報技術の開発に伴う情報化の時代となり、現在は、高度情報通信の発展による情報化社会の只中を、好むと好まざるに関係なく生きる時代と言えます。そして、情報化社会が生み出す価値観の多様化の中、「表現の多様性」も増々進行していくことでしょう。これは、春陽会 100 年ともピタリ重なる時代の流れです。「それぞれの闘い」展で振り返ったあの時代の魅力的な作家と作品、あの時々の出来事、あの良かった時代は、繰り返されることはありません。新たな未知の時代が、私たちの眼前には、在り続けます。

＊

春陽会第 100 回記念事業として本会が共催をした企画展「春陽会誕生 100 年それぞれの闘い〜岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」の第 4 章「展望：巨星たちと新たなる流れ」の紹介文として、戦後 10 年程の間の活発な活動を紹介すると共に、最終行には「春陽会は新しい時代に適した団体へと変化を遂げつつあった」と記されています。

そして今また、春陽会は新しい時代に適した団体への変化を遂げなければならない状況にあります。スター作家が揃っていたあの時代とは違うと思いがちですが、作家としての評価は後世の判断に委ねるとして、今、春陽人ひとり一人が「為すべきことを為す」ことで「時代に適した団体へと変化を遂げる」ことが可能になるのではないかと考えます。

＊

1970 年代、高度経済成長期の終盤、様々な社会問題を抱えつつも活力と面白味のあった時代、私は夢多き多感な 10 代を過ごしていました。

当時耳にした岡林信康の「私たちの望むものは」の 1 フレーズを引用します。

「 私たちの望むものは 繰り返すことではなく 」
「 私たちの望むものは たえず変わってゆくことなのだ 」

いつの時代であっても、求められる姿勢には普遍性があると感じます。

「 Like a Rolling Stone 」

そして、やるだけやったら「 Que Sera, Sera 」





第 44 回展懇親会の様子（日比谷・松本楼）撮影／笠木 實



2023 年 4 月 19 日　日比谷松本楼にて

100th exhibition report ／ 第 100 回記念春陽展 祝賀会

第100回記念春陽展のアーカイブ展示やWEB史料館の開設に向け協議を進める中で、100回展を記念する式典開催が話題になったのは、2022年の11月頃だったと記憶している。コロナ禍も収束傾向ではあったが、人を集める事には未だ抵抗の残る中での準備がスタートした。

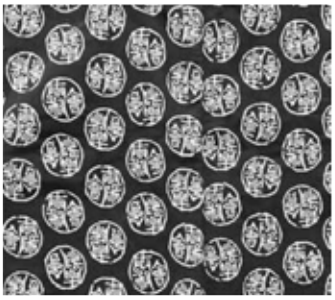
会場として上がったのは日比谷松本楼。春陽展を東京都美術館で開催していた頃は、何度もこの場所で授賞式懇親会が催された馴染み深いところ。乃木坂、六本木から交通の便が良いことも好条件となり、開催日時を第100回展初日の4月19日（水）18時～20時、会場を日比谷松本楼2階宴会場に決定した。

当日は招待者を含め会員会友130名が集い、理事長、記念事業実行委員長挨拶に始まり、来賓祝辞、鏡割りと続く祝賀の宴が盛大に催された。

（西野雅子／文）


第100回記念春陽展祝賀会

























100th exhibition report ／ 0419 祝賀会　記念品



第 40 回展記念品　100 回展会場に展示された。

100回展を記念して会員会友に配布する品を手拭いとした。第40回展で作られた浴衣の、春陽会ロゴをアレンジしたデザインを担当理事三浦氏に依頼した。このロゴは「春陽会誕生100年　それぞれの闘い」図録やポスターなどにも使われている。

手拭い絵柄の中に100の文字が隠されていることに気付かれただろうか。是非広げてみて頂きたい。記念品はもう一つ、祝賀会の引き出物として、同じ春陽会ロゴを銀箔で押した漆紙箱を準備した。手拭いと共に参加者に配られ、記念の宴に花を添えた。（西野雅子／文）






マスクは外せる様になったものの、目や耳を覆いたくなる事ばかり続くなか、第100回記念春陽展は催されました。第100回記念賞が設けられ、絵画部の田口令子氏が受賞され、記念賞にふさわしい瑞々しい作品が会場を彩りました。

特別展示として「春陽百年記」「北岡文雄と春陽会」が企画され、絵画部展示室入口横に春陽100年の年譜が飾られ、陳列ケースや壁面に貴重な資料の展示とともに映像がながされました。版画部展示室ではこれまで版画部を牽引して来た故北岡文雄氏の資料が展示されました。講演会は「春陽会誕生100年　それぞれの闘い　岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」展を開催する美術館の学芸員の方々をお呼びして見どころ、こぼれ話をお聴きしました。全国研究会紹介、場所を移したチャリティー・販売コーナーでは記念グッズが並び好評を得ました。

第100回記念春陽展　展覧会実行委員長　立堀秀明





【受賞作品】田口玲子「ふるりる 3」F130 油彩

●作家略歴
1952　大分県国東出身 大分市在住
2006　別府大学芸術文化奨励賞
　　春陽展初入選以降毎年
2007　別府大学芸術文化学科
　　絵画表現コース研究生終了
2008　けんしん美術展大賞
2015　大分県美術展最高賞
2023　第100回春陽展記念賞



第 100 回記念賞
田 口 玲 子／インタビュー

――春陽会第100回記念展は賞金100万円の公募でした。受賞の知らせを聞いた時はいかがでしたか？

受賞の知らせには本当に驚きました。春陽展が１００回目だと認識はありましたが賞金の事は全く意識していませんでした。「青天の霹靂」って言葉がカタカナで頭の中に浮かびました。喜びより先に「え～！！どうしたら良いの？困る～！！」と戸惑いで混乱した気持ちでした。

――１７回目の出品でのグランプリ受賞とのこと。受賞までのご苦労や思いはありますか？

出品を続けて来た事には特に苦労はありません。初めての出品は東京都美術館でした。いつの間にかそんなに時が過ぎていたのですね。全国から集まる作品群の中に置かれた自分の作品がどう見えるのか確認したく一度も欠かさず春陽展の会場に行きました。

――受賞作について制作秘話などお聞かせください。

四月の半ば頃からの一カ月間の、故郷国東の田圃のあぜ道を歩いている時に「ああ！このみどり！柔らかい緑の中に小さな草花が咲き始めてる！この感じを描きたい！」と思いました。あの感じが画面に現れているか？画面に問いかけながら夢中で描きました。

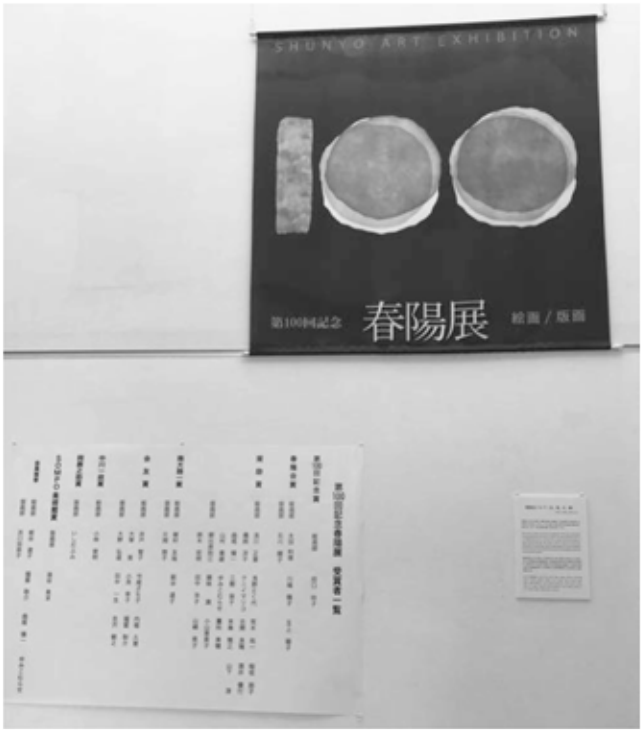
――創作について考えていることがありましたらお聞かせください。

何気ない日常のふと目に留まった景色の中の色彩の豊かさを画面の上に表したい。色彩の幸福感を絵の前にいる方に伝えるために。できるだけなにげなく。できるだけ自然に。私の感動を伝えたいと願いながら制作しています。

この度第１００回記念という大切な節目の回に私の作品に賞を与えて頂き春陽会の皆様に心よりお礼を申し上げます。春陽展、九州研究会展、選抜展など、たくさんの出品の機会を頂き、誘われれば臆せずに参加してきました。

いろんな場面で多くの先生方・先輩の皆様に育てて頂いて、ここに辿り着いたと思っております。賞を頂いて羽ばたく翼を頂いた思いです。自由に真剣に作品と向き合って行こうと思います。春の受賞の知らせを頂いた時はビックリしすぎてお礼の言葉を忘れていた事をずうっと後悔していました。有難うございました。





特別展示「春陽百年記」では、春陽会の組織、財務、展覧会について、図表と解説で歴史を振り返った。会を財政面で支えた方々の紹介、創立期からの写真や、昔の動画を大型モニターで閲覧するコーナー、webの「春陽会史料館」の体験コーナーも設けられた。





春陽会創立から現在までの大年表は全長７mに及んだ。資料写真と歴代理事長36人の写真が100年という時間を可視化させた。展示ケースには、100年前から代々事務所が大事に保管し続けた「茶箱資料」を含む多くの未公開資料が並べられた。（木村梨枝子／文）

100th exhibition report
国立新美術館

特別展示「春陽百年記」2F展示室
春陽会所蔵の資料展示
春陽会100年を検証する










中谷泰寄贈資料（史料）について







3F 版画展示会場

特別展示「北岡文雄と春陽会」3F 展示室

3階版画部展示会場壁面に三作品「雲海富士」「真昼の漁村」「羅臼岳錦秋」とともに春陽会講演記録を展示し、陳列ケースにはご遺族から御借りした貴重な版木と刷毛・彫刻刀等の道具、眼鏡や技法書、満州からの引き揚げをテーマとした版画集「祖国への旅」の一部を展示しました。また国際文化交流にも貢献した記録「オーストラリア活動日記」等も展示し、幅広い仕事を垣間みる事が出来る充実した展示となりました。

ながく春陽会を牽引してこられた版画部恩師の資料展示に携われた事を今、感慨深く思います。

ご協力頂きました皆様に厚く御礼申し上げます。　　ウチダヨシエ/文







100th exhibition report
国立新美術館











グッズ販売コーナー／　第100回記念展グッズ

グッズ販売は、第100回記念展を盛り上げるためと、会場に作品を見に来てくださったお客様の「記念品を持ち帰りたい」という気持ちに応えるために第96回展から準備を始め、出品者とお客様を繋げるような商品作りを心掛けました。

クリアファイル、眼鏡拭き、ミラー、一筆箋など毎年徐々に商品を増やしていき、集大成として第100回記念展には会員が制作したキーホルダーが出るガチャガチャ（カプセルトイ）を企画しました。このキーホルダーの製作には多くの会員からご協力頂き、キーホルダーは予想20個を越え38個販売、購入頂いた方からは作家の貴重な作品が出て嬉しかったとの声も多く頂きました。

グッズ制作、販売準備、販売業務にご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。

（諸星浩子／第100回記念春陽展実行委員）

キーホルダー制作にご協力頂いた会員のお名前（敬称略）
石川茂・石橋征道・伊藤昭二・井上直子・今尾啓吾・入江観・入手朝子・岩渕ケイ子・鵜居町子・浦野吉人・大河みえ子・小沢澄子・金井順子・金澤千鶴・川野美華・木村梨枝子・小林笑子・小林俊明・小林裕児・坂井和子・坂田和之・佐藤勤・鈴木善晴・高田三穂子・髙橋政子・髙橋かずこ・髙松博仁・瀧貴美枝・冨田泰世・中嶋康評・成川雄一・西濃俊明・西野雅子・長谷川光一・畠山昌子・檜垣友見子・藤井萌・星野文和・松宮直子・矢野素直・四谷明子・いしだふみ・ウチダヨシエ・大久保澄子・大津悟司・川井一光・塩田恵・篠田紀美代・澁谷美求・清水美三子・水津保美・杉藤万里子・鈴木誠一・鈴木雅弘・全田紗和子・竹内清美・立堀秀明・仲野壽志・中山岳美・林和一・務川めぐみ・山口剛史・横瀬信子・海老塚耕一

チャリティー／ 春陽会では、毎春開催される春陽展において会員有志の協力により作品のチャリティー販売を行い、その収益をNHK厚生文化事業団、日本赤十字社を通じて社会福祉、自然災害に対する義援金等として寄付し、社会貢献活動を行っています。



企画催事／ アートツアー

4月29日(土)

一般の方を対象にした絵画・版画鑑賞ツアー。

















絵画部審査・陳列・展示レポート

本年は、国立新美術館審査室の入室制限が解除され、実に4年ぶりとなる全会員による審査の実施となりました。4月7日の審査初日から、第100回記念展とあって地方からも多くの会員が参集して、熱のこもった3日間の絵画部審査となりました。

第1審で公募搬入者413人/1022点から、372人(内初入選33人)/398点の入選と、その中に賞候補27作品および会友賞候補18作品を選考し、最終日の受賞会議において第100回記念賞1名、春陽会賞3名、南大路一賞2名、奨励賞15名、そして会友賞6名を選出しました。

全会員による審査と受賞会議は、選考の過程においても春陽会の理念である「各人主義」に則り、夫々の意見を尊重した自由な話し合いによって終始進められました。

作品陳列は、会員と会友の協力の下、会場全体を通じて春陽会らしい一体感を形作りながらも、作品が放つそれぞれの主張が来場者にしっかり届くよう、メリハリのある展示を旨として行われました。

このほか会場には、創立以来の貴重な歴史資料とともに、数十年前の旧東京都美術館での搬入作業から審査、陳列の記録動画が映し出されました。映像からは声こそ聞こえませんでしたが、真剣に取り組む先輩方の姿に心打たれ、作品の発表、研鑽の場として100年の歴史を刻み続けてきた公募・春陽展の存在意義を確認するとともに、これからのあり方について、改めて考える機会となりました。

第100回記念春陽展 絵画部審査主任　沓間　宏






版画部審査・陳列・展示レポート

第100回という記念の節目を迎え、本年度は人数制限もなく全員審査が出来るようになりました。例年同様、公正な審査につとめ時間配分についても慎重に行いました。初出品16名あり、昨年より6名増は喜ばしいことでしたが、記念賞は何度も協議した結果、版画部の総意として該当者なしとしました。70年史よりあらためて先達の言葉を抜粋したいと思います。「モダンな洗練されたきめの細かい版画を春陽会版画部の行き方にしました」、「春陽会の版画は優雅、繊細、緻密な特徴があるが、それは的確な造形力を伴わなければならない。流行に迎合することなく自分の本質を見極めた真実の個性的表現と言うことで、その根底には自然に対する敬虔な態度と詩的な感情、技術の尊重、知的な造形などがあります。」春陽会版画部の原点をみつめなおし、将来を考える契機になったと思います。そして春陽会版画部は1952年には版画家による版画部独自の審査体系を作り、「我国の版画界において先駆的な役割を担い、同時に国際的な視野に立ち、洗練された技術によって初めて現出される洗練された詩情性豊かな都会的な美意識を堅持している。春陽会版画部が我国版画界に与える影響は多大なものがある。」と謳われたことを記したいと思います。近年現代版画は益々多種多様です。春陽会版画部の精神を受け継ぎ、どう発展させていくかは今後の課題です。今年も会場は全体を通して技法や色、額の大きさ等を考慮し、バランスよく一段掛けで観やすい会場を心掛けました。そして絵画部と同様の朱色の大きな垂れ幕を飾り記念展らしい展示となりました。

最後に「今年の会員の作品は良いですね」という言葉が記念展に望んだ我々会員へのことほぎとなりました。

改めて節目となる記念展を無事に終了でき皆様のご協力の賜物と感謝、御礼申し上げます。

第100回記念春陽展 版画部審査主任　ウチダヨシエ

春陽展
Shunyo Art Exhibition 2023

第 100 回記念春陽展 講演会
「春陽会誕生 100 年によせて」

2023 年 4 月 23 日　国立新美術館・3F 講堂　　開演 14:00　閉会 15:30



パネリスト：田中晴子 氏　（東京ステーションギャラリー学芸員）
　　木村 理恵子氏（栃木県立美術館学芸員）
司会進行　：土方明司氏　（川崎市岡本太郎美術館館長）
絵画部会員：入江 観 氏

立堀秀明（展覧会実行委員長）／文責

prologue



土方明司氏

今回の講演会は　第99回展実行委員会から提案による 「春陽会誕生100年 それぞれの闘い岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」展を開催する美術館の学芸員を招いて展覧会の見どころ、裏話を聞く企画を開催しました。

小池悟理事長より「ようやくコロナ禍が落ち着きをみせ、第100回記念春陽展が関係していただいた方々のおかげで無事開催できました」と感謝を述べ、**高岸まなぶ第100回展記念事業実行副委員長より**、田中晴子氏、木村理恵子氏、土方明司氏の紹介がありました。

土方明司川崎市岡本太郎美術館館長より、練馬区立美術館学芸員時代からの春陽会との関わり、公立美術館を含む4つの美術館が企画展として春陽展を扱うという事がいかに画期的であるかの話からはじまりました。

「春陽会誕生100年 それぞれの闘い岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」展 4つの章立て：
第1章－始動　第3の洋画団体誕生
第2章－展開　それぞれの日本、それぞれの道
第3章－独創　不穏のなかで
第4章－展望　巨星たちと新たなる流れ

episode

田中晴子東京ステーションギャラリー学芸員より,今回の４章からなる展覧会の概要と見どころ、章立ての説明がありました。

スクリーンに時代の寵児であった梅原龍三郎の画像が映し出され、梅原龍三郎が最初に春陽会にいたことの影響は大きく、ルノアールの弟子であり、写真をみ



田中晴子氏

ると今で云うイケメンでもあり帰国して最新の絵を描き、第1回春陽展の花形であったことが判ります。

今回の展覧会で田中氏の調査により、スライドに写し出された梅原龍三郎の作品が第１回春陽会出品作であったことが判明し、学芸員にとって新たな発見はかけがえのない喜びであったこと、そして「個人蔵の作品も探し出すには人脈を頼るしかなかく、借り出さないでいると、作品は忘れ去られ陽の目を見ない事になる」と語りました。

第３回展頃の岸田劉生の三味線を弾く麗子像と宋元時代の花籠からモチーフをとった作品が映し出され、デュ―ラーに傾倒していた細密描写の後、東洋に戻り春陽会に輝く作品を出品していた事が判るということ、続けて河野通勢の作品２点を示し「草土社系作家の河野通勢の良い作品を開催館が所蔵していた事は今回の展覧会には幸いでした。河野通勢は日本的な画題を油彩画にして、デッサン力が巧みで版画や挿絵も手がけていました」と語られました。

「第３回展で、岸田劉生も梅原龍三郎も残念ながら春陽会を去って行きますが、そういった事も春陽会の特徴かと思います。フュウザン会で活躍していた画家や、日本に傾倒したものが、春陽会の特徴でありましたが、西洋の最新動向を学んだ画家たちも一緒になって春陽会を築き上げて来たと思います。今回の展覧会は春陽会がどのように変化してきたかを理解する為、編年順で展示し章立てをしています。移り行く時代背景の中で、それぞれ個性があったとしても、共通するものが見えて来るかもしれない。画風を継続していくことが、際立ったかもしれない、集団の展覧会の中で見えて来るものがあるかもしれないという事が、今回の展覧会となっています」と説明されました。





木村理恵子氏

続いて**木村理恵子栃木県立美術館学芸員も加わり**、出品作家の紹介がありました。

「**小杉放菴**は初めは小杉未醒と云いますが、日本画的思考が強くなり雅号を変えて行きます。亡くなるまで春陽会の中心メンバーであり、洋画ばかりではなく文人趣味的傾向を持ち、油彩画の日本化に一役買い、日本画への関りは本格的でした。**森田恒友**が最初から春陽会に関りをもっていたことで、素描、水墨画にも力点をおいていたと考えられます。**萬鉄五郎**は油彩だけでなく、水彩画、水墨画と優れた作品を残していて、春陽会の関わりを考えても重要であ

第 100 回記念春陽展 講演会
「春陽会誕生 100 年によせて」



※スクリーンに映し出されたスライド資料は、東京ステーションギャラリー学芸員の田中晴子氏が用意してくださり、展覧会出品交渉中の画像、個人蔵の画像、著作権に関わる画像が含まれ、一般公開の出来なかった事は残念でしたが大変興味深いものばかりでした。（立堀）

ろう作品を出品する予定です。水墨画は萬の特徴でもありますが、後に小杉放菴が『老壮会』を開くという事を想起させられます。萬は1927年に若くして惜しまれつつ亡くなってしまい、フュウザン会以来非常に親しかった木村荘八と小林徳三郎が遺作室や画集に尽力します。異色の**小林徳三郎**は一時期イワシばかりを描いていて、ゴッホに傾倒した画家で、今回紹介致します。**三岸幸太郎**は劉生の影響から春陽展に出品しますが、劉生の去った後、中国旅行をし東洋風の画風となるが、評価されず、道化をテーマにした作品で新境地を拓きその後独立に移って行きました。同じく春陽展に出品していた**三岸節子**も移って行きます。

春陽会の特色である版画ですが、河野通勢や古川龍生も出品しています。パリ在住の**長谷川潔**が会員に迎えられます。二科からも誘いを受けていましたが、春陽会のほうが少し早かったので春陽会を選んだと書いています。山田耕作とも親しくパンフレットの絵なども提供していました。山田耕作の雑誌に**山本鼎**なども執筆していました。

戦後の版画として**清宮質文**と**駒井哲郎**を紹介します。清宮は父親もフュウザン会、草土社の画家で、春陽会第１世代と同時ですから、大きく世代が変わった事が判ります。駒井哲郎は岡鹿之助に非常に褒められた事が、活躍して行く大きな要因となります。**古川龍生**は春陽会に晩年まで出品し、今回は昆虫戯画をお見せできる予定です」

「**木村荘八**はフュウザン会で最年少の画家としてエッジの効いた作品を発表し、一躍脚光を浴び岸田劉生と行動を共にし草土社で活躍し、若い時から八面六臂で、英語も堪能で才能豊かな作家でした。川口松太郎所蔵作品のうらに≪木村荘八の傑作なり≫との記述を見出すことが出来ます」

「挿絵部が出来て洋画家の先鞭を付けたのは**石井鶴**三でした。大仏次郎の未完の大作『大菩薩峠』が有名です。挿絵と同じく春陽展に裸婦を出品しています。木村荘八の挿絵が評判で永井荷風がむくれたとの逸話もあります。草土社で活躍し文章も上手く、知識も深かった**中川一政**も人生劇場の原画を出品しています。８００枚近く描いたという事ですので性に合っていたのだと思います」

「**鳥海青児**は性格も絵もまったく違うのに三岸幸太郎と非常に仲がよく、岸田劉生にあこがれて春陽会に関わりますが、ご存じの通り岸田劉生は我が強く、唯我独尊で協調性がなく春陽会の主要メンバーと折り合いが悪く、早い段階で去ってしまいます。岸田劉生が去った後どうするかと云うと残るんですね。最初の頃は岸田劉生に合わせていたんですが、去った後は鳥海青児にしても三岸幸太郎も迫力のある絵になり大きく変わる訳です」

prologue

「春陽会は１００年の歴史の中で色々危機があります。梅原龍三郎、岸田劉生が抜け、残った者が自分たちの持ち味を生かし戦前の春陽会を支え、後々その東洋的精神主義を重んじる画家と西洋の造形理論に学んだ画家とが大きな勢力となり、戦前の絵を観て、≪海岸に馬糞が落ちている様な絵だ≫と言ったりして反目しながらもダイナミックな力を生みだし、刺激しながら１００年という時代を支えて来たと言えます」と土方氏がまとめられ、「６年も前から準備された今回は共同企画という理想的な展覧会になったと云うのが正直な感想です。これは４つの美術館の学芸員の熱意、春陽会の方々の努力の賜物であると思います」と云う言葉で〆られました。

最後に、**入江観より**三氏への謝辞と今後の公募団体の将来への応答がありました。

（たつぼり・ひであき ／展覧会実行委員長）

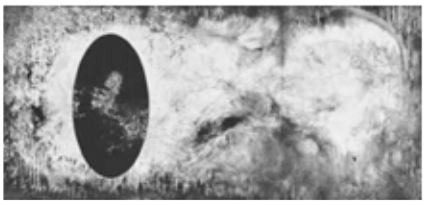
講演会後、登壇の皆様と実行委員で記念撮影。



岡・中川・SOMPO 賞

岡鹿之助賞

版画部会員
いしだ ふみ／ISHIDA fumy



『意識の森－0』 59.6×126.5
銅版・ポリマーグラビュール

版画的思考方法で

銅版では下絵を裏返して写し、反転した絵で描き進める。ポリマー版では一旦、アクアチントスクリーンを使用して露光、画面を粒子に還元する。これらの行為の繰り返しは私の思考方法まで形作ると感じています。この３年間、不安に傾いていた自分の意識を反転、粒子に還元した後再び結びつくように…と、自身との対話を続けて生れた作品が栄誉ある岡鹿之助賞に繋がり、大きな励みとなりました。心より感謝いたします。



岡鹿之助賞 推薦理由　　**推薦委員　大久保 澄子**

いしだふみさんは日頃からモノクロを基調とした安定した仕事振りと、その作品からはエネルギーが宇宙に拡散され放出され、内なる魂の叫びともとれるようなインパクトがあります。近年は円という形に魂のあり方を込めて制作されています。コロナ渦の中での自粛生活、繋がりも薄れて次第に心を病んでいく周辺の人々、自分の内側に目を向け、世の中の情報を集め、ものの見方を広げることで自己の意識が不安から安心へと、まるでオセロの様に反転していくのを実感した中での制作となった様です。

今年の二点は意識が変化していく中でのダイナミズムを白と黒で表現したと伺いました。

「意識の森―０」は版画室にありながら絵画そのものが展示されている印象を受けました。あえて横絵にしたことで、アクアチントで繊細に描かれた白く浮かんだ円と、メゾチントの楕円、背景の墨で描かれたポリマ版の自由闊達な線のフォルム、マチエールが共鳴し、作者の思いがストレートに伝わる力作でした。

第100回記念展での岡賞受賞誠におめでとうございます。

中川一政賞

絵画部会員
小林 俊明／KOBAYASHI toshiaki　『啓蟄の頃』　F100　油彩



消えてしまう風景

勢い込んでよしと思ってやった事はたいてい裏目に出る。カーッとなってスクレーパーで削ったり、残った絵の具を混ぜ合わせて塗りたくったり、上手くいかず裏を向けて寝てしまう。暫く経ってその絵を表にすると、画面の中に潜んでいた見たい風景が見える。捕まえたと思う時もあるが、一瞬で消えてしまう事もある。



中川一政賞 推薦理由　「小林俊明さんの仕事」　**推薦委員　入江 観**

私が中川一政賞の推薦に当たって、最も重要視することは、当該作品の賞そのものを問うことは当然だが、その作家が、どういう姿勢で仕事を続けて来たかを見ることである。そういう意味で小林俊明さんは、私にとって長年注目して来た人である。

小林さんは前川鋼平さんに師事して来た人だが、前川さんゆずりの腰の坐ったところがある人と思っていた。前川さんの剛直さはないが、より柔軟でしなやかな強さがある。

類を見ない独得の美しさを持つ灰色の変化を刺激的な線描で形成する空間構築は静かに見応えのある世界を作っていると思う。

必ずしも時流とは言えない抽象表現を迷いなく継続して行く姿勢に心から敬意を表したい。

SOMPO美術館賞

版画部会員
澁谷 美求／SHIBUYA miku　『楽園の女2』　92×50 銅版



万年青

青い作品を創るようになって15年たち、ご褒美に賞を頂けたのかな？

驚きました。地元の知人には「大変な時によくやった」と励まされとても嬉しく思いました。

一昨年に「SNAW2022春陽会次世代を担う作家たち」に選抜していただきこの賞に繋がったと思います。先生、先輩方に導かれここまで来た事は幸運でした。今後は少しでも会に関われる様にと思います。何処までも続くこの道を、有難うございました。



SOMPO美術館賞 推薦理由　「渋谷美求さんの銅版画世界」　**推薦委員　渡辺達正**

渋谷さんは第83回春陽展で初入選の後、第90回展、91回展で賞候補となり、第93回展、94回展奨励賞。翌年第95回展において春陽会賞を受賞したことにより、96回展で会員に推挙されました。

振り返ると第90回展より目覚ましく成長し受賞を重ねたのです。この10年で渋谷さんは春陽会版画部の次の世代を担う作家に成りました。

今回第100回記念展において「楽園の女２」は大作であり確かな技術により青の世界を表現しています。表現技法はアクアチントの腐蝕と線を上手く絡み合せ青のイメージを完成させています。

今後の制作発表が楽しみな作家です。

春陽会賞



移ろう時－Ⅰ F100 油彩



太田 利徳（絵画一般）

作品テーマを「人間の儚さ」としてこれまで宇宙と子供の対比をモチーフとしていましたが、行き詰まりを感じた為、今回からは人の営みの痕跡である廃屋と雑草の生命感との対比としてみました。

モチーフも技法も未だ試行錯誤の状況ではありますが、この度春陽会賞を頂いたことで今後の制作の方向性が見え始めたような気がしております。



水のかなたⅠ F100 アクリル

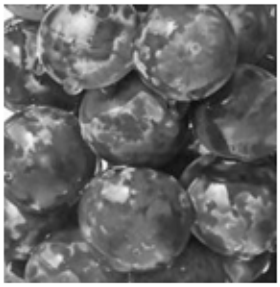


川端　陽子（絵画会友）

生命を育みながら、時に人を拒む「水」に魅せられ、描いています。私の描く「水のある風景」は、地上の何処なのか、過去か未来かあるいは前世か、見方はそれぞれです。

今回描きながら、夜中ふと、私が描いたのではなく、絵の中の水が自ら作り出したという SF 的な不思議な感覚に陥りました。

これからも壮大な水の世界に挑戦し続けたいと思います。

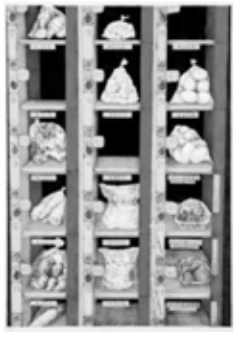


Reflection S100 油彩・アクリル



玉上　順子（絵画会友）

ぶどうの粒を辿って流れ落ちる水滴が、太陽の光に照らされ眩く綺麗でした。はじめは、こうしたシンプルなことに心が動きました。次に、濡れた球面にはこちら側の世界が奇妙な形で写り込んでいて、じっと見ていると異様な感覚を覚えます。どこかに闇の部分を感じるこのモチーフだから、繰り返し描いてこられたのだろうと思います。



Lock－Ⅱ 82×57 平版



石川　順子（版画会友）　13 年目の春

普段見過ごしてしまいそうな何気ない風景が私に語りかけてくる気がします。Lock-Ⅱは、人々が『鍵が開くのをじっと待つ』ような姿や規制された閉塞感、孤独感の社会を私なりに受け止めた作品です。今回 13 年目での初の受賞は、耳の不自由な私に光が射し導いて頂いた様で身が締まる思いです。今後は色彩ある版画なども展開していきたいです。

南大路一賞



岩壁Ⅱ　F130 油彩



植村　友哉（絵画会友）　「岩壁と私」

「絵を描けば観に来てくださる方がいて、制作環境と発表する機会もあり、良き理解者と切磋琢磨する同志がいる。この恵まれた環境に心から感謝して変わらず絵を描き続ける決意です。

そして、動かぬまま微かながら確かに風化し続ける岩壁。それを描くことで自分を見つめ、変わっていく自分を描き続けられたらと思います。



時が刻む 3　F100 油彩



組谷　道子（絵画会友）　初めての個展

２月の寒い日の一週間、銀座で個展をしました。お寒い中遠方より御来廊下さり、御批評を頂き一言一言が私の身にしみ、一生の宝物になりました。今後はそれらを生かせるように努力して、制作しなければと心に誓いました。画廊さんを始め何も判らない私にご助言下さった方々に感謝です。



Potager 島 XIV　87×119 木版



片岡　啓子（版画会友）

「ポタジェ島」は果樹・野菜・ハーブ・草花などを混植している実用と鑑賞を兼ね備えた庭を意味するフランス語のポタジェから発想しました。菜園を島に見立て作品にしています。デザインのアイデアはほとんどが畑作業をする中から浮かびます。花の咲いた大根に野菜の溢れる生命力を感じ作品にしました。

奨励賞



週末の地図　S100 油彩

浅川 正章（絵画会友）

「週末の地図」いつもの作品名。週末はやたらうれしい。映画、本、絵、まずは一杯。ウキウキな気持ちを街の場面に投影する。研究会でF氏は「偶然の表現に頼ると、生き詰まる、必然にする。沢山描こう」まさにそのとおりだ。己絵は、まさに日曜夕方だ。響き合う色面、生きた線が描けたらと願うばかり。「お魚くわえたどら猫♪」遠くから聞こえる。明日も頑張ろう。



私のスペース 2　F100 油彩

浅野 とく代（絵画会友）　続けること

私の居場所は何処ですか。腰掛けられそうにない細くて短かい脚の椅子が「場」を模索している。机と椅子をモチーフに向い合い四苦八苦しながら長年描いています。偶然にも流れる空間に「場」を見つけた時、充実感があります。描く楽しさがあります。背中を押していただいた先生方に感謝いたします。これからも頂いた賞を励みに精進して参ります。

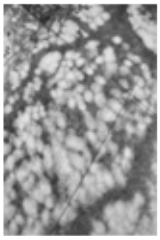


KENROKUEN Ⅱ　F130 油彩

荒木　祐一（絵画会友）

エネルギーがほとばしるような鮮やかな色彩と躍動的な筆遣い。野見山暁治が 6 月に逝った。屈強な私の父も 102 歳直前まで生きた。体の出来がちがうのである。私は決して 100 歳を越えることはないだろう。残り時間を考えたり、あれやこれやと悩んだりしないで、とにかく描くことにしよう。

奨励賞


響 2　F120 油彩

稲垣　朋子（絵画会友）　「下を向いて歩こう」

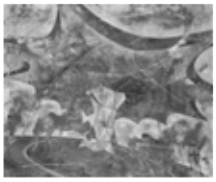
人それぞれ感動するツボは数多あるが、私のそれは足元に広がっていた。誰もが足早に通り過ぎる都会の歩道に、滲むように広がる鮮烈な影。－好きなものを楽しんで描けばいい－ その言葉に導かれ、影をひたすら描いてみることにした。先輩方の助言はいつもあたたかくて深い。迷想した時には足元を見つめ、あの時の感動を忘れずに描いていきたい。


空間Ⅲ　F130 油彩

鵜飼　冴子（絵画会友）　　表すこと

出来ないこと、あり得ないこと、不思議なことが好きです。発想源として制作の戦いに繋がります。失敗や無駄も回りまわって表すことの入り口となると思います。

2×４アメリカンの家、石膏ボードにペンキの壁は美しい光と影を作ります。野中の一軒家は寂しいです。遠くからは幸せな声が聞こえてくるように思います。


From Noon Till Dawn
F130 アクリル

クニイマリコ（絵画会友）　「これからも」

長年メリーゴーラウンドを描いてきて、見方や考え方が定着してしまったような気分と、柔軟に大きく見れば面白い所はまだまだあるという発見と、昨年はこの２つが一気にやって来た不思議な１年でした。

初期衝動は大切にしながらも、頭を固くせずに、まだ見えていない新たな一面を、これからももっと見つけていきたいと思います。


地底から　F120 油彩

古閑　良隆（絵画会友）　　内に在るもの

自然の中に常に生活の痕跡が伺えるものを求めていますが、描き終わると只の風景にしかなりません。自分の追及の浅さに情けない思いです。この課題は今後も続くと思いますが、何かを求め新しい表現を模索して行きたいと思います。


青き人と奇妙な出会い
F100 油彩

酒井　優行（絵画一般）

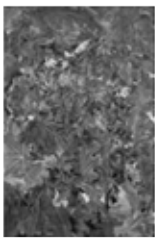
一昨年、自宅にて一人で制作することに行き詰まり、地元の画塾に入り他者の作品を見ながら自身の作品を描くことに取り組み出しました。そして一年の成果として、出来上がった作品を春陽展に出品することといたしました。まだ２度の出品ですが、今回、奨励賞を頂き、さらに絵画制作活動に心を砕き向かい合っていきたいと存じます。


扉の前で　F130 アクリル

曲尾　愼一（絵画会友）

今回受賞できて、少しは見る世界が変わるかと思っていましたが、そこにあるのはその絵を描き始めた時と何も変わらない。少しの成長もないのかと気持ちが沈みましたが、伸びしろがあるということだと慰めています。

描けば描くほど底なし沼にはまっていくようですが、一回溺れないと見えないものがあるような気がします。



イリュージョンII
F120 油彩

三樹　保子（絵画会友）

以前パリで買った筆をとうとう使い果たしてしまい丁度その時奨励賞を頂いたので、そうだ！これで筆を買おうと思い出掛けた。高くなっているのにビックリ。その時昔読んだ本に、筆は自分の指の延長のように又血の通うようになるまで決して買いおしみをしてはいけないという様なことを思い出し何本か買って帰ってきました。



帰路につく－薄暮－
F50 油彩

本島　雅之（絵画会友）

雨の日の車内からの風景をモチーフとした作品を描き始めて４年が過ぎようとしています。描くたびに課題が見つかり本当に面白いモチーフに巡り合うことができ幸せを感じております。描けば描くほど奥が深いなと思うばかりです。

今後も、現状の自分の表現に甘んじることなく、チャレンジしながら制作を続けていきたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



Page－132　F130 アクリル

山下　淳（絵画会友）　愛

絵を見るのが好きだった。決っして描こうとはしなかった。しかし 30 も半ばになって次第に見るだけではものたりなく感じ出した。自分だったらば、どんな絵を描くだろうか。大学では哲学を勉強していた。そう愛を感じたのかも知れない。それを表現できたらどうだろうか。斗いは始まったばかりだ。他の画家がしていることを私も出来たら良いのに。



石標 I　M120 アクリル

山村　泰雄（絵画会友）

石を並べて置くと何か意味ありげに見えます。積み重ねられた石の下には、もしかしたら何かが埋められているのではないかと。そんなどちらかというと不安な情景をイメージして描きました。現代は遠くの出来事が即時的にリアルな映像を伴って飛び込んで来るので、私のイメージはいっそう不安になりますが、壁の弾痕のように頭から消えないのです。

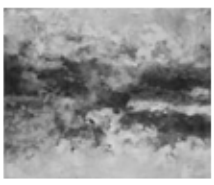


Holly night
F120 ミクストメディア

ゆみこむらせ（絵画会友）　私の絵について

うつくしき　空より飛来　ロケット　我らに
ハルキウ・ブラジスラワ

ウクライナの女性が詠んだ俳句です。
クリスマスの夜にも　容赦なく爆弾は降り注ぎました。
この冊子が出る頃　世界は　どう変っているのでしょうか。



無言の音－声－
150×182 水干絵具

藁科　美穂（絵画会友）

何となく描いていたものが年々形になっていくのがおもしろい。自分の中にこういう表現法があったのかと、描くたびに新鮮な気持ちになる。昨年と違っていたのは、自分が表現したいものが何なのか輪郭が見えてきたように感じたこと。ますます沼にハマっていく。

奨励賞



ゆらりー 36　50×67 孔版

朝比奈 則江（版画会友）　ゆらぎからゆらりへ

第 100 回記念展で賞をいただくことができ、大変光栄に思っています。「ゆらぎ」から「ゆらり」へと題名を変えて 40 作を超えました。ゆらゆらと規則的に揺れている「ゆらぎ」の状態から、ふと「ゆらり」と心が動く瞬間をとらえたいと想いました。自分の気持ちをオブラートに包むことなく、一瞬を表現できたらと思っています。



通過点　42×60 銅版

鏡味　満（版画会友）　道具を研ぐ

鉄道一筋に銅版画の制作に励む、銅版では道具を研ぐかかわりがある。切れが悪い時、作品におよぼす影響が大きい。再度、粗砥仕上げ用の砥石を使って、何度も試みながら切れを良くして行く。

一番大きな事は中部研究会や、日頃から、激励してくださる方々の支えがあったからです。受賞を機会に頑張ります。



彼方の地平Ⅳ　82×59 銅版

小山 恵美子（版画会友）

未だかつて体験したことのなかった 3 年間。
悲惨な状況を伝えるニュースに怯え、必要な時以外は家に閉じこもった。青空の下、人通りの絶えた静かなビル街を急ぎ足で歩いた日の情景が忘れられない。そんな思いが作品につながっているように思う。



気配－U（無人駅）　82×54 孔版

鈴木　宏明（版画一般）　百年たっても変わらないもの

AI も含め世の中はすさまじい勢いで進歩し変化を続けています。しかし同時に百年たっても変わらないものもたくさんあります。自然の姿形だったり人間の生死であったり、あるいは芸術的な衝動とかもそうです。私は版画で古い駅舎をモチーフにして制作しています。ここにも変わらない大切なものが、ひとつの「気配」として現出しています。



Poem indigo31　64×60 木版

田中　洋子（版画会友）　「版画に感謝」

3 年連続の奨励賞受賞となり、心から嬉しく感謝しております。

初出品から長い時を経て、多くの作品を見たり批評を頂いたりした経験が私に影響を与えたと感じます。若い時とは絵を見る目が変わったような気がします。また、版画を通してかけがえのない友と師を得られたことに感謝し、ますます版画制作に没入したい気持ちです。

奨励賞



彼方のヒカリ XV　50×70 平版

山崎　英子（版画会友）

作品下絵を考える時、何も浮かばず立ち尽くす日々もあれば思いがけず確信にも似た心境になる時もある。この繰り返しの時間が 15 年以上になった。若い頃からグラフィックデザインに魅了され永井一正、田中一光に憧憬を持っていた。リトグラフを制作する上でデザインの要素と向き合う事は常に課題である。

会友賞

井戸　智子（絵画）

初入選以来の自転車のモチーフを現在の空間構成に変更して数年が経過しました。これで良いのかと悩みながら続けて、やっと賞を戴くことが出来るまでに到達することが出来、とても感謝しています。構成もブルーを主とした色面も極めるには何通りも試行錯誤を繰り返さなければなりませんが、これからも挑戦して行こうと、意欲を新たにしています。



未知なる場所へ 2023 I
F130 アクリル

今尾 さち子（絵画）　　絵のこと

独学の孤独と少なからぬ苦悩のなかにありながら、充実した制作の至福の裡で没頭していると限りなく時が満たされていた。春陽会の重厚な油絵の世界へ一人水彩でかかわり四半世紀、当初から研究会等で厳しい批評を受けながら、単なる写実画でなく、自己のあるべき心象の水彩で歩む道を見極める努力を続けていけたらと思っている。

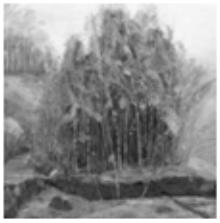


仮想と現実との乖離
92×180 水彩・ミクストメディア

内堀　久恵（絵画）

仔犬と散歩の途中の小さな神社の石段で一休み。そこからこんもり竹藪が見えます。風揺れる竹を見ながら、友達のこと、絵のこといろいろ考えます。ふと急にその竹藪を描いてみたくなりました。昨年春陽会展作品の講評を M 先生から頂き、「描きたいものを描きたい様に」と背中をドンと押され。風景画描いてもいいの！目の前がパーと明るく自由になった気がしました。

そして描きました。楽しかったです。



風のことづて
S60 油彩

大塚　晃（絵画）

私の作品制作は試行錯誤の連続だが、独自の視点や表現力が作品の新たな領域を切り拓いてくれると信じ、多忙な状況下で少ない制作時間に辛酸を嘗めながらも日々描き続けている。色彩や形の組み合わせを通して、自身の感情や思考の内面を作品に表出し、今後も観る者に解釈の余地を膨らませていける表現をしていきたい。



蠢動 III
P120 アクリル

100 th exhibition report 受賞の言葉

会友賞

小貝　幸子（絵画）

私の「次へ」

多くの画家の情熱を紡いだ 100 年 !! 私の初出品は第 59 回展で、ラグビーのスクラムを描いた。その後、スペインの旅の情景にテーマを変えて今に至る。蛇行しつつも、私の歩調で、私の「次へ」と向かいます。



Al Siguiente（次へ）
F130 アクリル

福冨　耿介（絵画）

心の中の風景

この数年、自分の心に響くままに空間を描くようになってきた。ところが、その広い空間が持つ表情の難しさが重くのしかかってくる。鳥の数など変更を繰り返していると、絵としては何とも気の抜けたものになってしまう。描写力不足である。

広々とした中にホッとするような心地よい空気感が描けるよう頑張っています。



ある日の午後
F130 油彩

大野　弘道（版画）

継続は力なり

この度の受賞大変嬉しく思っています。

父の仕事が染物業で、幼い頃より反物に染色する姿を見て育ち、私自身も絵に関する仕事をしながら、約半世紀に渡り版画制作に励んできました。原動力は「継続は力なり」との妻からの一言です。妻には感謝の気持ちで一杯です。今後は、マイペースで版画を続けていきたいと思います。



歓心の響き
71×60
アルミ版・ドライポイント

田中　一生（版画）

定年後木版画が上手くなりたいと思い習い初めの頃、会友の庄司孝志さんの版画に魅せられ、庄司さんのポルトガルツアーに参加した時の「ＰＯＲＴＯ」が初めて春陽展に入選しました。その後、大坂忠司さんのイタリアスケッチ旅行にも参加しました。現在、お二人とも亡くられて、ヨーロッパ等の木版画が少なくなりましたが、がんばります。



マテーラ
53×43 木版

吉沢　敏之（版画）

独学で木版画を始めたのが 45 歳の時で、今、21 年目です。水性木版多色摺りです。バレンは自作で、8 コと 16 コ撚りを面によって使い分けしています。別版を刷り重ねることで出る無数の色をコントロールすることを念頭に作成しています。客観的に自作を見つめ、自らが批評できる目を養うことが大きな課題です。これからもよろしくお願いいたします。



our of the Milky Way－II
60×91 木版

春陽会 2023

新会員紹介

new member

第 100 回記念展会員推挙



絵画部

組谷 道子



時が刻む 3

私の初出品初入選は第 64 回展でした。

私と同年令位の老木をモチーフにして、制作して来ました。会員の多くの先生方にご指導を受け感謝です。又落選の経験もし、紆余曲折の道でした。今回第 100 回記念展に会員推挙の報に接し、私の作品で良いのか？と複雑な気持ちです。今後は今迄以上に緊張感を持って、素直に、楽しく表現出来るように、制作して行きたいと思っています。



絵画部

福冨 耿介



ある日の午後

心の中の風景

私は何を描きたいのだろうか？　何度も自問自答をする。好きなものを好きなように描けないモヤモヤしたものがある。懐かしい風景に安らぎを感じたり、流れてくるメロディーや歌詞に心がホッとしたりする瞬間があるが、このような感情を画面いっぱいに広がる空間として描けたらいいと思っている。

これからもよろしくお願いします。



絵画部

曲尾 愼一



扉の前で

初受賞は 5 年前の第 96 回展でしたが、その感動がその後の苦しみの始まりとなりました。自分の絵画人生で最も苦しく、しかし充実したこの 5 年間をこれからどう生かせるかわかりませんが、「会員」という名前をいただいて、何か変わらなければという気持ちを強く持ち、行き当たりばったりの制作スタイルは変えず、描き続けていきたいと思います。



絵画部

ゆみこ むらせ



Holly night

ひぐらし

いつでしたか　講演会にいらした先生の『食ったものしか　出ん』

この言葉に衝撃を覚えました。

この先　何を　どう食らってゆくのか　消化不良気味の

くたびれた　この生命体は　今　これを真剣に考えております。

カナカナや　ひとひ　ひとひを　生くるなり　　23／9月



版画部

浜口 加奈子



DISTANCE VII

星座を眺めて

過去に私が魅せられた 1 つの花をテーマに、版画作品を作っています。空に星座があるように、私の版画世界に星座ならぬ私の花座を作っていけたらと思っています。花の形や表現の仕方に、その時々の感情や心情を込めて表せたらと思いつつ制作を続けています。

追悼



令和 5 年 11 月 16 日ご逝去　享年 92

絵画部会員

岩浪 弘 氏

「岩浪さんを思う」

多感な賢友、岩浪 弘さんは高校の頃から、呼吸器系の疾患で療養休学をされ、晩年には難病との闘病の日々だった。とくに奥さんに先立たれた窮状を、最も信頼していた高岸まなぶさんのご厚意による手厚いお世話で過ごされた。高岸さんの連絡で近況を知り、私は訃報を覚悟したが、いざその時が来ると、暗闇に落ちてゆく様な淋しさに襲われた。東大和市の斎場を訪ね、ご遺体と対面し、しばし思い出にふけった。淋しく悲しかった。貴方はW・ブレイク（英）の作風に傾倒されながら、西欧神話にモチーフを求め、生死に対する独自の画境を繊細な形態と緊密な空間によって表現された。作曲家ストラビンスキーが云った「二流は借り、一流は盗む」の評言に従えば、岩浪さんは一流に違いない。療養の間に思索を重ね、鋭い文明批評を口にして、ボクはよく戸惑ったものだ。

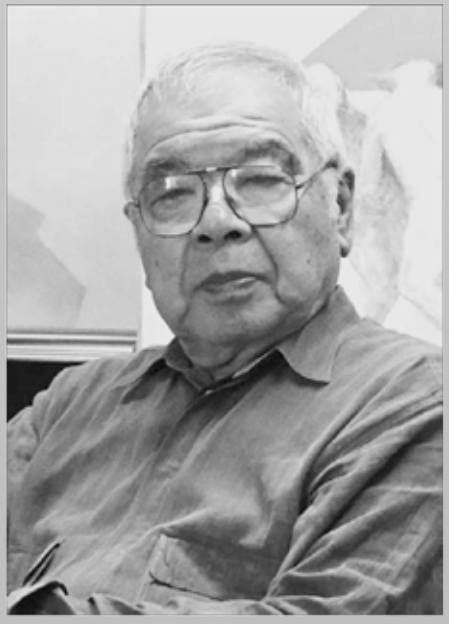
記憶に残るのは、ボクが東京研究会で、当時主任の畠山昌子さん作成の画像を基に、構図と比例分割の講話をした後に、「横山さん、はずすために線を引くんですよね。」うーん、岩浪さん一流の逆説だね。確かにボクも自由なイメージと、画面の規矩との葛藤を楽しみ、確固とした直観の位置と形が決まると、その喜びったらないなー。「横山さん、このへんでやめてコーヒーでもいのみません。あそこのマンデリン旨いですよ。」

横山了平

令和５年６月５日ご逝去　享年 90

絵画部会員

前田 舜敏 氏



前田舜敏さんを偲んで

私が芸大に入学した時、前田さんは3年生だった。数えてみれば、以来70年のつき合いであった。その頃、前田さんは学年の上下を通して抜群の描写力を過して共通のアトリエの中心的存在であった。

後年、イタリアに出かけて作風は明快なモダニズムに展開するが、その頃の裸婦習作は前田さんの全作品の中でも記憶に残るものである。

私が芸大を卒業する頃、前田さんは加山四郎先生の信頼も厚く助手をつとめながら、一方で講師をしていた中学に専任の教員として招んでくれた。数年間職場を同じにしながら、その頃結婚した前田さんは、新婚家庭を見せつけるように、奥さんの自慢の料理でもてなしてくれたこともある。

その後、私がフランス留学から帰ってくると入違いに前田さんはイタリアに出かけてイタリアに嵌ってしまった。元々明るく開放的な性格がイタリアの水に合ったようだ。作品は大胆、明快な幾何学的な構成の作風に変ったが人間的なぬくもりは失うことはなかった。時折、帰国はしたが、日本の画壇に馴染むにはイタリア滞在が長すぎたかも知れない。それでも後悔の気配はなかった。それ程イタリアが好きだった。

晩年、春陽会の審査に顔を出しては、決まって入落スレスレの作品に暖かい眼を向けてそれを救った心根の優しい人であった。

何という用もないのに、「どうしてる？」と電話を掛けあう相手が居なくなって心底寂しい。

入江 観

追悼



令和 5 年 9 月 29 日ご逝去　享年 94

絵画部会員

増井　英 氏



増井英先生は2023年9月29日、94歳で逝去されました。

しばらくお目に掛かることはなく、体調がお悪いと研究会主任に聞いていましたが、突然の訃報でさみしい気持ちでいっぱいです。つぎつぎと、先生のことを思い出そうと記憶を辿っていると、にこやかにゆっくりと話される大阪弁がはっきりきこえてきます。

初めてお目に掛かったのは研究会に入会した時です。そのときの研究会主任が増井先生でした。作品を持参しないと肩身の狭い思いをする緊張感のある研究会でしたが、先生はけっして、研究生にむかって厳しい批評や、叱るようなことはありませんでした。いつも穏やかに、微笑まれているように感じました。

手元に、増井先生の3冊の著書があります。

『人はなぜ絵をかくのか』『ライオンの口』『通天閣の下の赤ちゃん』です。3冊とも編集工房ノアからの出版です。『通天閣の下の赤ちゃん』は2002年に第18回織田作之助賞佳作を受賞しました。

1981年にジャパン・エンバ美術コンクール大賞を受賞。「大阪のグランドホテルで盛大な大祝賀会」と研究会主任後任の藤井俊一先生が春陽帖関西だよりに記されています。

絵画での大賞、著書での大賞受賞だけでなく、なんと最初の大勝は1歳7ヶ月の時、大阪市主催の赤ちゃんコンクール大賞受賞です。赤ちゃんコンクールで入賞して以来、「赤ちゃん」のアダ名で呼ばれたと「文学界」選評に杉山平一氏が書かれています。先生のあの暖かい笑顔は赤ちゃんの笑顔だったのだと気がつきました。

現主任高田さんの話では、晩年は病気との付き合いなど、辛いこともあったようですが、背の高い美人の奥様に看取られ、幸せ色の幕を降ろされたそうです。

こころよりご冥福をお祈り申しあげます。　合掌

藤田 典子



令和 5 年 7 月 28 日ご逝去　享年 83

絵画部会員

水谷　武 氏

「水谷 武さんを偲んで」

亡くなられて間もない今、私が水谷武氏のことを追想するにあたり、氏との関係は絵画に関することばかりで、彼について述べることはさほど多くありません。しかしそれらの記憶が私の心に深く残っております。

最初の出会いは、とある文化センターでの師弟の関係からはじまります。彼は10歳年配で、どちらかといえば寡黙な方でしたが、その後のお付き合いから、内に意志の強さを秘めた人物だと気付きました。

私がその教室を任されて5年目くらいになったころ、教室内で春陽展に出品しようといった機運が高まり、それぞれが自発的に挑戦することになります。そのような中で水谷さんは自分の画風を見いだして行かれたようです。会員になり亡くなられるまでの8年間、私との会話は絵画に関することだけであり、われわれを取り巻く雑多なことに関わらない、心豊かなひとときであったことが想い出されます。

彼の画面からは明確な手法と手順、自分の世界観がはっきり見て取れます。絵画以外のことでお互いに話したことはありませんでしたが、漏れ伝わるところによると電力会社の原子力専門家で要職に就いておられたということです。このようなことがありました。私は六十歳定年と同時に教室関係の仕事から離れようと決めていましたので、20年以上お世話になった文化センターをやめることを口外したところ、水谷さん云わく「僕にはよくわかります。身軽になれることが羨ましいです」。彼はたいへん重責のある職業に就いていた方でしたので、努めていた当時を想いふとそのように漏らされたのではないでしょうか。

お亡くなりになられてから奥様とお会いする機会があり、はじめて彼の人生における絵画との付き合い、ご職業、興味などをお話いただきました。

ご冥福をお祈りいたします。

杉藤哲正

追悼



令和６年１月５日ご逝去　享年 81

絵画部会員

大橋 久純 氏



猫好きだった大橋さん

令和6年（2024）の元旦は、穏やかな朝陽であけました。その夕方（16時05分ごろ）に突然、能登に地震が起こり、それからどんどん被害が報じられ、日本中が暗い気持ちになりました。数日が経った頃、大橋さんの訃報が届きました。突然のことで、未だに信じられない思いです。

元旦にはご長男一家と二人のお嬢さん、皆さんおそろいで談話が弾んだことと拝察していました。1月2日に自宅で転倒され、救急車で病院へ、ご家族は病室には入れなかったと、後日お聞きしました。5日に容態が急変してそのまま帰らぬ人に……ご家族のお気持ちは、計り知れません。

動植物を大事にし、愛情をもって上手に世話をされていました。時々携帯に、用件と一緒に愛猫や花の写真が届いていました。

最後にお目にかかったのは、令和5年12月3日、春陽会関西研究会の日です。研究会では、いつものように、早めに吹田の会場に到着されていました。大橋さんは研究会で、『正論』をわかりやすく言葉にされるので、研究生にも喜ばれていました。帰りには、会員仲間でお茶をした後、吹田から大阪まで一緒でした。『とうとう　藤田さんより足が遅くなったわ～昔は早歩きが得意だったけどな～』『今日は駅からタクシーに乗るわ！』だいぶ歩行がつらそうでした。『良いお年を。気をつけて！』と、言葉を交わしたのが、最後になるとは……。

大橋さんはいろいろな美術団体を経験し、『そろそろ身をかためんと！』と考え、春陽会への出品を決めたと冗談のように話されていました。初めて天理の画廊で個展を見せて戴いたとき、抽象的な作品やアカデミックな描き方の作品もあり、『ベテランだな』と感じました。

第101回展の出品作品はどのくらい描かれていたのでしょう？　あちらの世界できっと続きを描かれていることでしょう。自由な無限の空間で。制作されている大橋さんの姿を想い描き、冬の夜空に手をふっています。

藤田 典子



令和 5 年 4 月 13 日ご逝去　享年 87

版画部会員

大上　吉成 氏

追悼　大上吉成氏

大上さん、長い付き合いになりましたがお別れの時が来てしまいました。

私がはじめてお会いしたのは確か第57回春陽展大阪展の打合せ会の時だったと思います。会場の隅の方で銅版を刻んでおられました。

大上さんは開業医で患者さんが困らないようにと休診日も家にできるだけいるようにしておられたそうですね。その合間を縫って打ち合わせ会にも顔を出されておられました。時間をフルに使われ何事に対しても全力投球でやられておられ、作品は人物をテーマに誕生のドラマを描き続けられていました。そこに人好きで命を大切に思う作家の姿勢が見てとれます。いつまでも若々しく、好奇心に溢れ、だれとも気さくに接し、あたたかな心で多くの人との交流を楽しまれ、それが制作の活力になっていたように思います。

もっと、もっと、おいしい酒を飲んで語りたかったですね。

ありがとうございました。安らかにお眠りください。

志野和男

第 100 回記念展の特別企画として『春陽会中部物故会員展』を開催



第 100 回記念春陽展 名古屋展

愛知県美術館ギャラリー
（愛知県芸術文化センター 8 階）
2023 年 5 月 16 日～ 21 日
共催：中日新聞社　東海テレビ放送　東海ラジオ放送







第100回記念春陽展名古屋展は、令和５年５月16日（火）から５月21日（日）、愛知県美術館ギャラリーで開催し、春陽展に出品された全会員（辞退者除く）、受賞者、中部地区入選者（会友・一般）の作品合計319点、内訳は絵画236点　版画83点を展示しました。中部支部関係の入選者、受賞者については奨励賞４名、会友賞1名中川一政賞1名、会員推挙者１名賞候補者が10名という結果でした。

今回は第100回展記念展でもあり当日は共催である東海テレビ放送がニュースでも取り上げ、18






日には中日新聞にも展覧会の記事が掲載されました。

展覧会期間中の行事として、16日（火）の午前中、東直樹氏と杉藤万里子氏とによる出品者一般鑑賞者対象のアートツアーを実施し40人程の参加があり春陽会について理解していただく事ができました。

20日（土）午後1時から午後2時30分まで中部研究会主催の会場批評会が開かれ、絵画部では小池悟氏、田中俊行氏、金澤千鶴氏、入手朝子氏、版画部では林和一氏、山口剛史氏、鈴木雅弘氏に中部地区在住の会員が加わり非常に有意義な批評会となりました。

午後3時からは、東京第一ホテル錦にて、入江観先生の「セザンヌを巡って」と題しての画談会には中部地区以外の参加者も多数参加され大好評でした。

画談会終了後は共催の報道各社を加えた賑やかで楽しい懇親会となりました。

翌日21日までに5379人の入場者があり無事終了することができました。

また、第100回記念展の特別企画として『春陽会中部物故会員展』を開催いたしました。かつての中部会員の方々の作品に触れ懐かしさと共に品格をともなう作風に再び感動を禁じえませんでした。ご家族の方々にも喜んでいただくことができ作品をお借りする苦労もすっかり忘れる瞬間でありました。

おかげさまで名古屋展を無事終了することができ、この場を借りてお礼申し上げます。

中部支部事務所　小林俊明

画壇会から

セザンヌを巡って

講演者：入江 観 氏
（絵画部会員）

日時：2023 年 5 月 20 日 (土)
会場：東京第一ホテル錦





小学校の担任の先生の「不器用も芸のうち」の一言が今まで絵を描き続ける支えとなった。

セザンヌを卒業論文にする際、吉川逸治先生に1時間見てくるようにと言われ、芸大の文庫の複製画「カルタ遊びをする人」を見に行き、絵には見切れる絵と見切れない絵がありセザンヌの絵は、1時間あっても見切れる絵でないことを知った。

フランス留学に際し、最終的な目的は入江先生とセザンヌの重なり合うところとずれる部分の確認であった。

セザンヌは印象派の一人と言われているが、その時刻と場所を必要とした他の印象派の画家達と違い、感動した変哲もないものを描くこと、「空間を刻む」ことにあった。塗り残しの多いセザンヌの絵は効果を考えていたとも言われているが、描けないところを描かなかった勇気ある画家であった。また、コンポジションの画家であると言われているが細部を執拗に見て実感、リアリティを大切にした画家でもあった。

日本に帰り、さて描こうとしたとき、なだらかな丘陵に石造りの建物の中で育ってきた油絵に対し、チマチマとした山々、ペラペラなトタン屋根の日本の風景はどうしても美しく感じられず、フランスの景色を思い出して描いてみたが、実際に見ないとリアリティがなくなってしまい、全く描けなくなってしまった。



ある時、土手の上を自転車の少年が走って行くのを見てこれだと思い急いで制作に取り掛かった。何の変哲もない場所からどれだけのものを見出せるか、「ちょっとちょっと」と呼ばれるような情景を描いていこうと思い、自分を取り戻すことができたのである。

留学から帰った当時、造形主義的なものが主流であり、否定されていた「抒情的」な部分がセザンヌと入江先生とのずれる部分でありそれは創立以来からある春陽会の土俗的な部分につながるのではないか。

哲学者森有正は「ものを見ることから、ある種の実感を広げてゆく」と言っている。また、庄野潤三の小説の中に水飲み場に野鳥がやってきて、それが飛び去った時、水が平らになり青空が映っていたことを書いている。なんと素晴らしい目の持主か、そんなふうにものを見る大切さを教えられた。

セザンヌから何を学んだか、これだとは言えないが、ものを見ることにより何か感動するものがある、それを実現するという「感動の実現」ということが絵を描くことではないか。

（小林俊明／文）



大阪での春陽会展は
第１回の大正 12 年から
開催。
会で集う度に
諸先輩や同世代から
受ける刺激によって
私達は育てられている

第 100 回記念春陽展 関西展

宝塚市立文化芸術センター
2023 年 6 月 1 日～6 日
後援：大阪市・大阪市教育委員会

いよいよ記念すべき100回展！緊張した思いの中、折悪く台風と梅雨前線の活発化で暗澹たる思いでしたが、無事第100回記念春陽展関西展を宝塚市立文化芸術センターで開催することができました。(2023年6月1日～6日)

会場研究会では、交通事情が悪い中 絵画部小池悟理事長、中部支部事務所小林俊明氏、中部支部版画部杉藤万里子氏が講師としてお越しくださいました。的確で丁寧な講評は皆さんの次作への指針となったことでしょう。有難うございました。







大阪での春陽会展は第1回の大正12年から開催されております。戦禍の影響などで開催されない時もありましたが、先人達の努力で今年の第100回記念展へと脈々と回を積み重ねてきました。そのエネルギーは何だろうと考えてみますと、一つ思うことは「刺激」です。

会で集う度に諸先輩や同世代から受ける刺激によって私達は育てられているという実感。これこそが春陽会の持つ魅力だと思います。会いたい、話したいという思い、人が生きていく中でこれが必要だとコロナ禍の3年間で改めて気づかされました。作品を制作し発表し語り合う、この循環こそが生きている実感に繋がると思います。懇親会もその一つでしょう。4年ぶりの集いは和気あいあいとしたものになり、準備に奔走された方々の苦労も報われたことでしょう。

関西支部の受賞者初入選者は、絵画部は春陽会賞1名、南大路一賞1名、奨励賞1名、会友賞1名、初入選者4名、版画部は岡鹿之助賞、賞候補者4名、初入選者2名という快挙でした。関西支部ではこのところ会員の不出品、退会、ご逝去と残念な事が続きましたが、受賞等が大きく弾みをつけてくれたことは確かです。

ともあれ100回展です。歴史の重みを感じますと同時にこの回に居合わせた喜びをかみしめながら、私達がこれから進んで行く道を改めて考えてみる良い機会になったのではないでしょうか。皆さんのご協力のもと沢山の来場者に恵まれ、無事第１００回記念展を終えることができましたことを改めて感謝申し上げます。

春陽会関西支部事務所　金澤千鶴









SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 2023　part 1
春陽会 第 100 回展記念企画

春陽会第 4 世代の作家たち

東京都美術館 ロビー階 第 1 展示室　入場無料

2023 年 12 月 5 日（火）～ 11 日（月）
9:30 ～ 17:30（最終日 15:00 閉会）
《関連イベント》アートツアー 12 月 9 日（土）13:00～14:00

（文／木村梨枝子）

ピンク色の花を象った立体作品から、漆黒のメゾチント。シルクスクリーン、エングレーヴィング、珠玉の水彩そして油彩の大作、と様々な表現が 2023 年 12 月 5 日から 11 日まで都美術館のロビー階第 1 展示室に並んだ。現代にいたる春陽会の多様な土壌を作り上げた第 4 世代をクローズアップしたこの展覧会は、1 階で同期間に行われた SNAW 春陽会受賞作家展、東京研究会展と併せて、2.600 人を超える入場者を集めた。そして、会員会友はもとより、広く絵画関係者、一般観覧者の皆様から口々に良い展覧会だった、との評を頂くことができた。


「春陽会第 4 世代の作家たち」会場







第 4 世代展の会議が初めて持たれたのは 2022 年 4 月で、その時の企画書には、第 100 回展記念企画のメイン展覧会である「春陽会誕生 100 年　それぞれの闘い　岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」展の次の世代の展覧会として「1960 年代から 70 年代の初めにかけて春陽会に参画し、会内外で際立った力を発揮した作家たちの業績を展観するもの」とある。外部協力研究者によって絵画 18 人、版画 6 人が選ばれ、各作家に担当の会員が付いての出品交渉が始まった。出品調書が揃って外郭が整い、運営委員会を立ち上げたのは 23 年 4 月だった。多くの委員の惜しみない協力のもとに、この大企画は一気呵成に開会を目指した。

＜出品作家名＞

アイト ヨハネス
安谷屋　正義
安喰虎雄
今關鷲人
入江　観
岩浪　弘
浦野吉人
太田洋三
大庭勝郎
加藤助八
幸田　美枝子
小坂　茂
小林　ドンゲ
齋藤　カオル
丹阿弥丹波子
成川雄一
馬場檮男
濱　實
星　俊六
前川鋼平
松島治基
八木伸子
横山了平
吉江麗子





「春陽会賞」受賞時と同じポーズで。入江 観氏

会期中にはアートツアーが行われ、35 名を超える参加者が絵画、版画それぞれの講師と共に会場を廻った。また、会員が交代で解説員として常駐し、技法や第 4 世代についての説明を行った事、春陽会の歴史フロー図を掲示した事、出品作家が昔、春陽帖などに書いた文章の抜粋を掲示し、作家を知る縁（よすが）とした事等も好評だったようだ。会場では「第 4 世代」と、前年度開催された「春陽会次世代を担う作家たち」展の図録、そして「春陽会の 100 年」の 3 冊が販売され、第 4 世代を軸に春陽会の過去と未来を自在に往還することができたのである。

（文／きむら・りえこ）









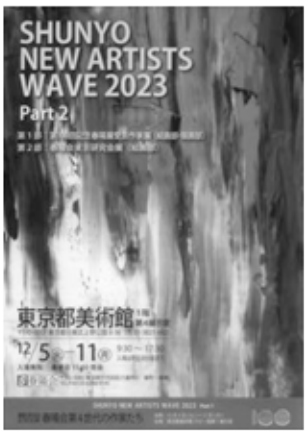




SNAW2023 Part 2 レポート

「春陽会第４世代の作家たち」と同時開催で、東京都美術館１階の第４展示室で
受賞作家展と東京研究会展が開催されました。





SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 2023　part 2

第１部：第 100 回記念春陽展受賞作家展

第２部：春陽会東京研究会展（絵画部）

東京都美術館１階 第４展示室

2023 年 12 月 5 日（火）～ 11 日（月）

SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 2023　part 2

第 1 部：第 100 回記念春陽展受賞作家展
第 2 部：春陽会東京研究会展（絵画部）

東京都美術館 1 階 第 4 展示室

2023 年 12 月 5 日（火）～ 11 日（月）





第 1 部

受賞作家展

第 100 回記念春陽展において優秀な作品を発表し、各賞を受賞した作家達の受賞作品と新作品を紹介しました。


受賞作家展会場





第 2 部

東京研究会展（絵画部）

東京研究会（絵画）では、年間を通じた作品講評やクロッキー会・講演会などを企画し研究生の研鑽の場となる活動をおこなっています。

長年拠点としていた中野サンプラザが閉館。代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターへと会場を移しました。

年間の成果を発表する場として、33 回という長きにわたり「球の会」展を開催してきました。2020 年からは SHUNYO NEW ARTISTS WAVE の一環として東京研究会展を開催しています。


東京研究会展会場

2023 exhibition/ PICK UP!

湘南を描く　入江観展

12月10日（2022年）**～2月5日**（2023年）

会場：茅ヶ崎市美術館
主催：公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団



入江 観展 図録



近年制作された作品と、茅ヶ崎市美術館や個人が所蔵する入江作品のなかから、湘南を描いた代表作を中心に展示されました。

会期中には、対談「入江観の絵画と人生」（2022年12月11日）や、アーティストトーク（2023年1月8日）、講師入江 観氏によるワークショップ「松の木を描く」（2023年1月21日）など、関連イベントが催されました。

小杉放菴と春陽会の画家たち



7月8日～9月3日

会場：小杉放菴記念日光美術館
主催：公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館
　　日光市／日光市教育委員会



小杉放菴記念日光美術館は、日光社寺群のお隣にあって瀟洒な佇まいを見せています。訪れたのが8月17日（金）でした。混雑は予想以上、周辺道路は1時間超の渋滞！今年の行楽地は侮れない！でも、館内はそれとのギャップが心地よいほどでした。

春陽会草創期の作家たちの作品が間近に見られるとともに第100回展アーカイブで見た資料が展示されてました。美術館の収蔵品なのですね。当館は春陽愛に満ち溢れているのです。

入江観氏の作品が一室分展示されていました。氏の「風車売」のポストカードを購入し、また、喧騒に満ちた行楽地に戻っていきました。

（文／髙松博仁）

三浦明範―vanitas vanitatum

7月15日～8月13日

会場：武蔵野美術大学 美術館展示室３
主催：武蔵野美術大学 美術館・図書館







大型作品を中心に、油彩とテンペラによる彩色作品からシルバーポイントと墨によるモノクローム作品まで、29点が展示されました。

【100 回記念事業】

春陽会誕生 100 年

それぞれの闘い　岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ

9 月 16 日～11 月 12 日



会場：東京ステーションギャラリー
主催：東京ステーションギャラリー
［公益財団法人東日本鉄道文化財団］
共催：一般社団法人 春陽会、日本経済新聞社
特別協力：東京国立近代美術館

会内外から好評を博した展覧会は、予想を大きく上回る2万２千人を超える入場者があり、有料での入場者は８割近くありました。

関連イベントとして、10月3日に日比谷図書文化館にて、春陽会主催クロストークが開催されました。



プレス内覧会の様子

春陽会版画部　秋季展

9月7日～11日

会場：文房堂ギャラリー



本年度の秋季展は春陽会第100回記念展と合わせて100回記念秋季展を意識した展覧会でした。会員のみの参加とし版画部の歩み等のパネル展示をしました。

春陽会版画部秋季展は秋の春陽会版画展として、版画部会員の小品発表、研究会、交流の場として1972年に発足し、1978年に版画部秋季展と改め、兜屋画廊を経て文房堂ギャラリーで継続し今日に至ります。

春陽会版画部は「繊細でモダンな洗練された、きめの細かい絵画としての版画」を指標としました。SHUNYO NEW ARTISTS WAVE 、受賞作家展などが活発化していく中、秋季展も分岐点に立ちます。今後は受賞者の次に並ぶ賞候補者を拾い上げ、研究会を通して丁寧に指導していくことを念頭に、対外的に見せる展覧会を視野に入れて活動していく所存です。

文房堂ギャラリー側でのバーチャルリアリティーのサービスが加わり、対外的に春陽会版画部秋季展をアピール出来る環境が整った場を最大限に活用していくことで、会の活性化に繋がることを願っております。

（文／秋季展主任　大久保澄子）

第40回中部春陽2023 年展

11月21日～26日

会場：愛知県美術館　8F ギャラリー（A~E 室）

主催：中部春陽年展



対話研究会の様子



紅葉も終盤をむかえ寒気漂うころになると、中部では恒例の「中部春陽年展」が開催されます。中部地域を拠点とした公募団体として平面芸術では最大の規模を誇っております。

元々は中部春陽展からはじまり、「年展」となってから40年が経ちました。その間の様々な出来ごとは、まさに中部の春陽会の歴史でもあり、当初から深く関わってきた者として、懐かしき良き時代を顧み、将来に向けての気構えを強くいたします。

2023年展は絵画・版画の展示点数は約150点であり、名古屋を拠点とする展覧会として質、展示内容ともに申し分のないものであったと思われます。

（文／年展事務所　杉藤哲正）

全国研究会から

春陽会研究会では、下記を始めとした活動が行われています。
■年間を通じた作品批評会
■会場批評会
■講演会
■全国研究会による選抜展
■各研究会ごとの展覧会、講演会など



カット／沓間 宏

東京研究会

2023 年度最初の研究会を、6 月 18 日に中野サンプラザで開催しました。その 2 週間後、中野サンプラザは 50 年の歴史に幕を下ろし閉館となりました。東京研究会が長きに亘り、研究会の拠点としてきた感慨深い場所でした。

現在は、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターに会場を移し活動を続けています。皆さん、代々木にもお越しください。（主任 中台ゆう子）

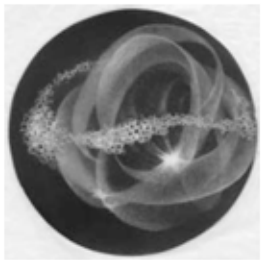




東京研究会版画部《受け継がれるもの》

2023 年開催した研究会展。2 年前の開催時にくらべて参加者も来場者も増え、研究生同士が交流している様子なども見らるなど、やっとコロナ禍前に近い雰囲気に。最終日のレクチャーでは松島順子さんをお迎えし、春陽会に関わってきた記憶、そしてこれから制作する方へのエール、貴重なお話をしていただきました。（主任 内山良子）





カット／いしだふみ

北海道研究会「講評について」

令和 5 年 11 月 26 日本部より藤井武氏を講師に招き開催しました。今回は各自、自分の絵に対する思いなどを自由に書いてもらいこれを資料として講師宛に先に一括して送付しました。沢山の資料に目を通し戴き当日、作品と先の資料でとても良い講評会をして下さいました藤井武氏には重ねてお礼を申し上げます。6 月には念願のデッサン会を実施し来年に繋げたいと思います。　（主任　佐藤愛子）



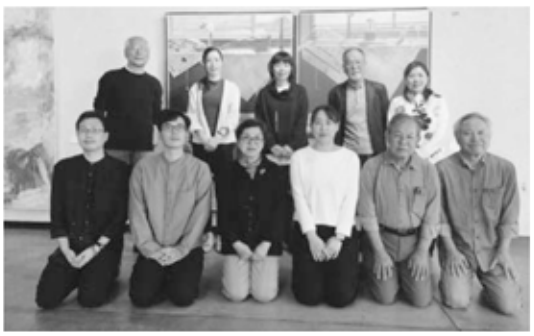
九州研究会

九州研究会では、10 月 31 日～ 11 月 5 日まで大分市、11 月 7 日～ 12 日熊本市で、第 17 回研究会展を実施しました。

4 日夕、派遣講師の中台ゆう子さんを囲んで、懇親会。5 日 10 時から講評会を行い、若者？たちも中台さんの的確な講評に、熱心に耳を傾けていました。

また、5 日の定期総会で、主任を川野美華さんに、会計を草場菜穂子さんに交代しました。

（主任 野村正則）



講評終了後中台ゆう子さんを囲む九州研究会全員の集合写真



カット／松宮直子

群馬研究会

風薫る 5 月 14 日（日）に群馬研究会では、【マイクロスタイリングワックスについて】のワークショップを開催いたしました。講師は小林裕児先生です。

当日の会場はまるでお料理教室の雰囲気の中、ホットプレートで粒状素材とペトロールを温め混ぜ溶かしワニスの香りを楽しみました。

（主任 坂井和子）





中部研究会

中部地区では秋に恒例の中部春陽年展が開催されておりますが、本年度は７年振りの研究会展を開催致しました。

趣旨としては、春陽展第 100 回展を節目に各自がこれまでの制作を振り返り、更なるモチベーションを高めることを目的としたものです。

参加者は過去に制作した作品も含め 2〜4 点を出品し、会場で時間を掛け研究する機会となりました。

（主任 杉浦尚史）











カット／沓間 宏

中部研究会版画部

ワークショップ「紙版画と和紙の裏打ちの実演」

今回で「紙版画のワークショップ」の 3 回目を向かえ、講師を会友の鈴木知子氏と永幡民子氏により、伏屋史子氏邸で行いました。16 名が集まりニスによる濃淡の表現の指導をうけ、想像以上の深みのある作品に仕上がりました。大津悟司氏の「和紙の裏打ちの実演」は入念な手法とそれによる張りの美しさには目を奪われました。今回も満足のいく一日となりました。

（主任 杉藤万里子）



栃木研究会

今年の研究会展は、9 月 30 日（土）〜10 月 3 日（火）の日程で栃木県総合文化センターで行われ、沓間宏氏を講師に招聘いたしました。もう何年かぶりに懇親会も設けました。今年の研究会で68回を迎えます。戦後 10 年足らずで発足して年月を積み重ね今に至る。春陽会第 100 回展の重みを再認識しているのと同様に、68 回展も同様にすごいことだとしみじみ思います。どこかにクロニクル的なものが残っているのだろうか。とか感慨に耽ながら展示作品を見回していたのでした。

（主任 髙松博仁）



富山研究会「夏季研修会」

7月２９・３０日、会員齊藤澄人氏を招き、裸婦デッサン会、講評会、実技を伴う講義を実施しました。二日目の講義「ツクルヲイキル」では、印象的なエピソードと資料をご提示いただき、描くことと生きることの意味・意義を考える貴重な時間を持つことができました。この際に行ったドローイングの一部は 12 月の富山研究会展でも紹介しました。

（ 桑嶌美代子 ）



神奈川研究会　　第 70 回神奈川研究会展

2023 年 10 月 18 日（水）から 10 月 22 日（日）まで第 70 回神奈川研究会展が開かれました。このところの研究会生の減少もあり、出品点数について不安があったのですが、案の定昨年より大幅減少･･･研究会係会員が電話で追加出品依頼してくださったおかげでなんとかなりました。市民ギャラリー全館での実施はあと 1 年。来年はどうなる？

（主任 萩谷かおる）



山陰研究会 研究会の現況

・2019 年第 96 回展受賞作家展（島根県立美術館）開催時、研究会退会者 6 名

・2020 年よりコロナ禍で研究会は行わず。

・2023 年 3 月、会友佐藤収男氏「出雲神楽を中心とした自選展」開催

・2024 年 3 月 8 日～3 月 10 日「山陰研究会展」を松江スティックビルで開催予定

現在 9 名。（会員 3 名 会友 5 名 一般 1 名）

（主任 梶谷修弘 ）

瀬戸内研究会

絵画の方は広島在住の会友お二人が真摯に制作を頑張っています。絵画部会員の不在が数年来続いており、なかなか研究会の開催が難しい状況ですが、各地の会員のご厚意のもと郵便を用いての作品講評や交流が図られております。昨年 9 月には広島で 3 人会うことが叶い、制作のこと、地元のこと、近況など交流することができました。地域のチカラが広がっていくことを願っています。

（畠山昌子・本部代行）

瀬戸内研究会版画部

瀬戸内研究会版画部は現在 5 名で瀬戸内海をはさんで活動しています。隔年で開催している研究会展は行われない為、ライン画像で意見交換会を実施しました。今後第 101 回展、瀬戸内研究会（版画部）に向けての意見交換会等を対面で行う予定です。将来的には研究会の人数を増やし、体制を整えて行きたいと思います。

（主任 川井一光）

東北信研究会

去る 11 月 11 日 岸鹿津代先生、長谷川光一先生の、御二方をお迎えし、第 21 回春陽会信州研究会展の会場研究会が行われました。一作品ごとそれぞれ御批評頂き、充実した研究会となりました。懇親会も御出席頂き、楽しい一日となりました。

（主任 野口 俊文 ）



全国研究会から

関西研究会

「関西春陽会絵画部展 2023」は 9 月 20 日（水）より 9 月 24 日（日）まで原田の森ギャラリー本館 1 階にて開催しました。

9 月 18 日午前搬入展示、午後作品を語る会（研究生同士で自作を語り、お互いの理解を深めるための場となるように昨年から計画）

9 月 23 日会場研究会、畠山昌子氏を迎え、次作への展望を持つことが出来ました。

出品者 27 名、作品数 43 点、入場者数 498 名

関西研究会賞―中山悦男
関西研究会奨励賞―長谷川美代子、為永富美子
後援は兵庫県、神戸新聞社
協賛はホルベイン、ターナー色彩

（主任 高田美穂子）







関西研究会版画部

関西春陽会版画 2023 は、9 月 12 日から 17 日まで神戸市の原田の森ギャラリー 1 階で開催しました。会友、研究生中心に作品総数 30 点を展示しました。今年は新研究生 2 名入会され、活気あふれる展示となりました。

会場研究会ではウチダヨシエ氏を講師に迎え、制作の指針となる的確な講評を頂くことができ、その後の懇親会では、久しぶりに交流が図られ、充実した展覧会となりました。

（主任 山口剛史）



静岡研究会

静岡では「第 25 回春陽会静岡研究会展」を 10/23～29、市民ギャラリーで 開催しました。今年から版画の出品者が 5 名に増えて、存在感を増しています。(絵画 9 名、合計 14 名)

10/28(土) には講師に伊藤昭二先生をお迎えし、会場研究会を行いました。

伊藤先生は各々の作者の個性の良さに触れ、本人の制作意図、悩みや迷いを聞きながら、「頭の中であああしたらこうしたらというより思ったことはどんどん形にすること。」など、心に残る批評をいただきました。また、批評会聴講者の方から入会希望があったことも申し添えます。

（主任 瀧 貴美枝）



南信研究会

第 100 回記念 春陽展南信展地区出品者展

アートプラザ 108 岩谷画廊（諏訪市）主催の出品者展が 7 月 6 日から 6 日間にわたり開催されました。飯田・伊那・諏訪から 18 名の参加により個性豊かな作品展となりました。最終日に受賞者内堀久恵さんの会友賞受賞のお祝い会を兼ねて、創作談義に大いに盛り上がりました。

（主任 小林理一）



中信研究会　　小人数だけど・・・

中信研究会は、現在 5 名が在籍しています。本部の畠山昌子氏に主任代行を務めていただいています。研究会には、東京より遠路松本まで来ていただき、本展出品作品へアドバイスを頂いています。ここ数年、中信での研究会を開催出来なかったのですが、とても刺激となり勉強になっています。少人数ですが、仲間で頑張って行きたいものです。

（中村 勤）



カット／沓間 宏



カット／松宮直子

研究会本部（絵画）

第 100 回記念展の本展では 4 年ぶりとなる会場批評会が行われました。講師をお引き受けくださった会員諸氏には厚く御礼申し上げます。第 101 回展に於きましても通常通りの開催を予定しています。今年は隔年で開催の「春陽会全国研究会選抜展」の年です。各地区研究会、関係各所と連携して、魅力ある作品を春陽会の内外に向けて送り出してゆきたいと思います。

（本部研究会絵画部主任　畠山昌子）

研究会本部（版画）

本展での会場批評会は対面での講評が 4 年ぶりとあって質疑応答盛んに行われ、あらためてコミュニケーションの必要性を感じました。

版画は多種多様で材料、技法など時代とともに変化しています。様々な情報を得られる交流の場としての研究会は重要な存在だと思います。版画部にとって骨格といっても過言ではありません。

静岡では嬉しいことに版画の研究生が増えていると聞きました。

一方、第 100 回を節目に退会したいとの声も多く本部として各研究会と連携をとり協力できることはしていきたいと考えております。

（本部研究会版画部主任　ウチダ ヨシエ）

全国研究会から

函館出身のバンド GLAY。winter,again で詩うハリストス聖教会の鐘の音が聞こえる場所で制作をしています。和洋折衷な坂を降りると道南エリアで展開するハンバーガーチェーン、ラッキーピエロ。マティス、クリムト、ルソー等 17 店舗其々がアートなテーマで感性もお腹も満たされます。

投稿：安田祐子｜北海道 会友



チンタラ一世

春陽会誕生 100 年『それぞれの闘い』で会場に作品の展示は無かったのですが、図録に掲載がありました、銅版画の深沢幸雄氏は私の勤務地でもあった、千葉県市原市にアトリエを構えて創作活動をしておりました。

メゾティントの自動目立て機を開発して「チンタラ一世」と名付けていたそうです。

投稿：在津義人｜東京

地域の美術会の先輩方とお話をする中で、今も日常的に山本鼎、石井鶴三、そして岡鹿之助の名前が出てきます。

鹿苑会があったから、この辺は当時昔みんな春陽だったというお話も多くの先輩からお聞きしました。そんな地域で絵を描けることに幸せを感じ、同時に頑張っていかなければと思う日々です。

投稿：渡辺智恵子｜東北信 会友

「春陽百年、母校百年、寄贈百号」

百が揃っておめでたいと創立百周年記念に勤務する母校の愛知県立横須賀高校に春陽出品作を寄贈しました。本校初代講師は中部春陽会の礎を築いた大澤鉦一郎で三作品が校長室で大切に飾られています。

運命的な作品寄贈は地元新聞に大きく掲載され、画業は人生の活動源だと実感しました。

投稿：長谷川景子｜絵画会友





カット／長谷川景子

夏、水木しげる妖怪百鬼夜行展が名古屋市博物館で催されました。実物大ぬりかべの初めて見るその姿は迫力に圧巻でした。漫画の原稿はとても繊細でパネルの妖怪紹介もとても詳しく、あっという間に時間が過ぎていたのは妖怪の仕業なのかなぁと？あと「べとべとさん」実物大も忘れられません。

投稿：嶋田尚典｜名古屋 版画

静と動

絵を習い始めた時にテニスも始めました。絵画とテニスはその頃の私の憧れでした。そして 20 年以上続き今に至ります。

集中して描いた後は消耗します。でもそれはテニスコートで汗を流すと心地よい疲労感と共に解消されます。

絵画とテニスは静と動、相反する性質で心と身体の均衡を保ってくれるライフワークです。

投稿：加藤順子｜富山

大阪の南に住む私は一番近い和歌山近代美術館をよく訪れる。

南海和歌山市駅を降りて和歌山城の横にある現代的な建物がそれである。

入場料は高齢ゆえ無料、常設で十分楽しめる。

暗い部屋のロスコを椅子に座って眺めるのもいいし、運がよければ、駒井哲郎の「手」や「束の間の幻影」にあえることができる。

投稿：辻義弘｜大阪　版画会友

投稿コーナー

地域からのメッセージ

今年見た展覧会の感想、制作中のつぶやき、誰かにみせたい風景、美味しいもの自慢 etc.
出品する全ての方からの投稿

関西支部　版画部　志野和男氏が大阪市市民表彰を受けられました。文化功労部門で、美術の分野からは毎年一人しか選出されないので大変な栄誉です。12 月 19 日に表彰式があったとのことですが、志野氏は、残念ながら今、足の調子が悪く出席はされなかったようです。大阪市公式 HP には受賞理由として「志野和男さん：多年にわたり、ペーパースクリーンと呼ばれるユニークな版画技法を用いて数々の作品を発表し、大阪市内を中心に毎年個展を開催するなど、大阪の芸術文化の振興と発展に貢献した。」とあります。

投稿：いしだふみ｜関西 版画会員

“神様の世界も面白い”

旧暦 10 月 10 日、ここ出雲には八百万の神々がお出でになる。後日、出雲大社で縁結び等の神議 (かみはかり) が行われる。これを神在祭 (かみありさい) と言う。神々は、同月 16 日に全国にお帰りになる。

ところが神様の世界も面白い。大国主命の娘で、美しい女神の下照比売命 (したてるひめのみこと) に会おうと帰りそびれる神様がいる。わざわざ、その神を送り出すお祭りもある。これが出雲最後の神等去祭 (からさでさい) である。

私は春陽会展に、神話をテーマに作品を描いているが、帰りそびれにならぬようにしたいものである。

投稿：佐藤收男｜山陰 会友

先日、古代メキシコ展を観るために、九州国立博物館に足を運びました。美しい造形の数々、特に心惹かれたのはマヤ文字のある石彫でした。文字の中にある横顔や形は、なんともユーモラスで謎めいていました。

投稿：敷島 唯｜九州研究会

雑感

瀬戸内研究会の絵画部も現在畠山主任（研究会本部）、広島在住の奥田・藤本の 3 名という非常に少人数の寂しい絵画部となりました。今年（2023 年）9 月 24 日、畠山主任に来広頂いて 3 人でこれからのことなどもろもろ、絵のことも話し合うことが出来たこと、半日短時間広島の街と原爆ドームを見て頂いたことが一年で一番でした。

投稿：藤本泰雄｜瀬戸内研究会



銀杏の黄色

春陽会山梨研究会からの投稿です。季節はまさに錦秋。私達の地域は山が近く、自然に恵まれております。絵の題材に事欠きません。この美しい自然をキャンバスにどのように表現するかが悩みの種ですが、考えているうちに季節は移り銀杏の黄色も色褪せてしまうのが現実です。でも努力努力です。

投稿：木藤勇興｜山梨研究会

マヨルカ焼きの壺は手に入れたものの

2023 年 4 月から 7 月にかけて、3 ヶ月間イタリアのシチリア島、タオルミーナというエトナ山の北東側の風光明媚な街に留学した。

何故、シチリア島なのかと言うと、この島にはギリシャ、ローマ、アラブ、ノルマンの文化遺産・美術が沢山残っていてそれらを実際に見たいと思ったからである。

授業がない週末は島内各地の街へ、それらを訪ねてフラフラ、小旅行を繰り返した。

さて、いよいよ帰国が近くなり、お土産を友人、知人にあれこれ、お菓子などを購入した。自分には以前から中川一政先生の花の絵に出てくる、マヨルカ焼きの壺が欲しいと思っていた。

しかし、限られたスーツケースの中に割れる可能性もある、高価な壺を入れ運搬することを躊躇し、一旦は陶器店から出たものの、ここで物にしなければ後悔すると思い購入した。それが今では一番の宝物である。

生憎、まだ絵には描けていないのだが…。

投稿：木村髙雄｜静岡



つぶやき

2022 年印象に残った展覧会は、「リヒター展」です。

「ビルケナウ」は、言葉では言い表わせない現実を絵という形のあるものにしていた。重いテーマではあったが、私の心の中に残る展覧会の 1 つになった。

投稿：入手朝子｜絵画会員

自然の中で
定年後春陽会への出品を再開し、研究会の会員の方々からの指導を受け、当落を心配されながらも 5 回目で何とか会友に推挙して頂きましたこと感謝致します。野見山暁治氏の言う、「自然の奥に潜む巨大な物」に到達できる日を夢見て、前回からモチーフを近くの奥蓼科の自然に変えました。

投稿：牛山義浩｜南信研究会

「私にとっての絵を描くこと」
コロナ以来、家での生活に慣れてしまい、外との繋がりは、展覧会だけになってしまった。夜アトリエで、その時の気分で選んだ CD を聴きながら、絵を描く事が私は好きだ。思うように描けなくて苦しい時もあるが、キャンバスに向かい、あれこれ悩みながら描く事も、私の生きていく力になっている。

投稿：大隈久仁子｜群馬 会友

次回出品作の制作中ですが、下絵が出来上がるのが毎年真冬。この時期銅版の腐蝕作業は我が環境では苦痛の極み。もっと暖かい時期にと毎年誓うのですが今年も「誓い虚しく」です。昔は苛立ちを覚えましたが、年のせいかそんな懲りない自分を「今年もか」と愛おしく思えたりもする今日この頃。

投稿：八木文宏｜瀬戸内　版画会友

（今年見た展覧会の感想）
中之条ビエンナーレは温泉とアートと自然を楽しむことができます！アートの展示の会場１つである四万温泉の、千と千尋の神隠しのモデルになった旅館もあります！

投稿：坂井和子｜群馬　絵画会員



投稿コーナー
地域からのメッセージ

春陽帖

カット／ いしだふみ
　　沓間　宏
　　立堀 秀明
　　松宮 直子
　　長谷川景子

カットをご投稿いただいた皆様、ありがとうございました。（編集部）



カット／立堀秀明

春陽会

一般社団法人 春陽会

〒102-0085
東京都千代田区六番町1 番町一番館
TEL/FAX　03-6380-9145

春陽帖 101 号（No.105）2024 年 4 月 17 日発行
発行者・発行所　一般社団法人 春陽会
編集　すずきくみこ　　印刷・製本　アベイズム株式会社